

## 医局・教室だより

### 産科婦人科学教室の紹介

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科  
健康科学専攻 発生発達成育学講座  
生殖病態生理学分野(旧産科婦人科)

教授 小林 裕明



九州全体の産婦人科医を集めた学会の懇親スポーツ大会で、野球部門で2大会連続準優勝となった教室員たちと、テニスとゴルフ部門で優勝されたOBたちを囲んで、“オール鹿児島”による制覇を祝ったスナップ(平成29年6月3日)

#### 教室の沿革

鹿児島大学医学部産科婦人科学教室は昭和18年、山下町に開校した県立鹿児島医学専門学校に端を発し、昭和24年に県立鹿児島大学医学部と改称され、昭和31年に国立に移管し、昭和49年に現在の桜ヶ丘に移転しました。昭和18年に初代教授として町野 碩夫教授が就任し、昭和40年に森 一郎教授が、昭和58年に永田行博教授が、平成16年に堂地 勉教授が就任されました。平成28年4月に小林が第5代教授として就任し、現在に至っています。

#### 研究・臨床活動

永田先生と堂地先生が教室のみならず本邦の礎を築いてこられた不妊内分泌と女性ヘルスケアの研究と診療は、当教室にとって貴重な財産であり、現在もその維持・発展に努めています。とくに女性ヘルスケア(女性医学)は堂地先生が本邦の初代委員長として立ち上げられた分野ですが、周産期、腫瘍、不妊内分泌に次ぐ産婦人科領域の4つ目のサブスペシャリティとして専門医機構にも近々認定されます。国内でこの4つの専門領域を万遍なく学べる施設はそう多くなく、今後

も堅持すべき当教室の特色の一つです。

周産期の研究と診療に関しては、合併症を有する妊婦に加えて、心奇形を始めとする胎児疾患を有する妊婦患者が年々増加し、小児科、小児外科および第2外科(小児心臓手術)等のご協力を得て、高度な集学的医療を行っています。また、外科的介入を要する重症妊娠・分娩例も増えてきて、新たな手術療法を開発する臨床試験も始めました。高度なNICUを有する鹿児島市立病院には早産症例が集まるという分業化が進むかも知れませんが、ローリスクの早産症例は当科で引き受ける等々、緊密な連携のもと市立病院の負担を減らす努力もしていきたいと思っています。

腫瘍の研究と診療に関しては、多くの国内外の多施設共同臨床試験に関わっています。また長年、独自に取り組んできた子宮頸癌のセンチネルリンパ節の術中生検をもとにリンパ節郭清の省略を試みる臨床試験では、省略できた患者さんからの下肢リンパ浮腫の発症はなく、現在は開腹術のみならず腹腔鏡やロボット手術にも併用しています。この度、日本産科婦人科学会内にセンチネルリンパ節試験の保険収載を目指す委員会が設立し、その委員長を拝命したため、今後は当科が多施設共同試験を事務局として進めていくこととなります。また、長年行ってきた若年子宮頸癌患者への妊孕性温存手術である広汎子宮頸部摘出術に加え、最近では頸癌合併妊婦に対して児救命(体外生活ができるまで子宮内で妊娠を維持)目的の広汎子宮頸部摘出術にも取り組んでいます。非妊娠時の同手術に比べると非常にハイリスクの手術ですので、患者さんには安易にお勧めしませんが、現在までに2名の元気な赤ちゃんを届けること

ができました。鏡視下手術とロボット手術の分野でも国内のリーディング施設であり、子宮頸癌に対する腹腔鏡下広汎子宮全摘出術とロボット支援広汎子宮全摘出術、および子宮体癌に対する腹腔鏡下傍大動脈リンパ節郭清併用手術の3つを先進医療として、頸癌に対するロボット支援広汎子宮頸部摘出術および体癌に対するロボット支援傍大動脈リンパ節郭清併用手術の2つをダヴィンチ本社からの受託研究による私費診療試験として取り組んでいます。下線をつけた4手術が現在の婦人科領域高難度新規医療技術の全てなので、その先の更なる高難度手術の開発に現在チャレンジしている訳です。前任地時代に初代のダヴィンチSシステムで九州初の婦人科ロボット手術を執刀しましたが、その後Siをへて、今回当院では最新のXiシステムで執刀する機会に恵まれ、図らずも全機種の実験経験を有する国内唯一の婦人科医となりました。その経験を糧にXiの利点を生かした、「アイソトープ法と蛍光法併用によるセンチネルリンパ節の術中生検」や「デュアルドッキング法による子宮体癌手術」など、国内初の試みを行っています。このような取り組みのおかげか、2016年に雑誌AERAで報じられた“年間がん手術数の多い良い病院”の特集において、当科は婦人科がんの分野で九州1位、特に子宮頸癌の手術数では本邦6位でした。これだけ少ない主治医と執刀医数の当科が、都心のがん専門病院などと肩を並べることができたのは患者さんをご紹介いただいた先生方のおかげとこの場を借りて御礼申し上げます。

基礎研究としては、ナノメディシンを用いた腫瘍選択性・低毒性抗がん剤の開発、頸癌患者におけるHPVウイルスの

研究、リンパ節微小転移を診断するPCR法の開発、皮膚の加齢変化に与える各種ストレスの影響の解明等々に取り組んでいます。しかし、新設したP2実験室には大学院生等の実験スペースが充分余っているという、まだまだ残念な状態です。

### 教育と産婦人科医リクルート

医育機関である大学にとって教育は最も重要な責務であるとともに、医師不足に悩む産婦人科にとって大事な勧誘の場でもあります。QOML (Quality of my life) を求める若手医師たちが増えてきて産婦人科を敬遠しがちな時代にあっても、産婦人科の学問・医療としてのやりがいと面白さは体験すれば必ず分かって頂けると思いますので、医学生の講義やベッドサイドには教室員全員で熱意と情熱をもって取り組んでいます。おかげで6年時のクリニカルクラクシップや初期研修の選択時に産婦人科を選んでもくれる学生・研修医が増えてきました。後期研修医になる時には是非とも“鹿児島の産婦人科医”を選択して欲しいものです。そのためには、「鹿児島の産婦人科後期研修は充実しているし、専門医になっても素晴らしい未来がある」と感じて鹿児島県のプログラムを選んでいただくことが重要です。今回、鹿児島市立病院産婦人科のご協力を頂き、2つの基幹施設からなる鹿児島の産婦人科専門研修プログラムができあがりました。互いが相手の連携施設になっていますし、専門医取得後もお互いの病院を行き来するサブスペシャリティ研修が可能となっていますので、“オール鹿児島”で産婦人科医を増やす体制ができたと思います。

おわりに

来春には子宮体癌にロボット手術が保険適応となる可能性があります。現在、米国の子宮癌の8割弱がダヴィンチで行われているように、今後本邦でもロボット手術が普及していくことは間違いなく、その安全な普及に向けて今春、日本婦人科ロボット手術研究会が発足しました。その初代会長にご推挙いただき、来年1月に城山観光ホテルで学術集会をすることになりました(<http://jsgrs.org/jsgrs06/>)。学生・研修医の方々は無料ですので、興味のある方はぜひご参加下さい。

以上、教室紹介をさせて頂きましたが、鹿児島県医師会の皆様には“はやぶさプラン”という産婦人科医師不足に対してもご配慮いただいた対策基金をはじめ、多くの場面でお世話になっています。この場を借りて深く御礼申し上げますとともに、今後とも更なるご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い致します。

(文責：教授 小林 裕明)

